



## 山際壽一著 ゴリラからの警告「人間社会ここがおかしい」をよんで！

本を読むとは、以前は本屋さんで活字本を求めて読むのが普通であった。ところが昨今は、kindle（電子書籍）とかパソコン（タブレット・スマホ）で読む時代がきた。私も最近それを初めた。当初戸惑ったが何とか親しむことが出来る。活字離れを危惧されている時代、これからの若い方達には大いに親しまれるであろう。手軽のうえ、本代も安く整理しなくてすむ。

### 目の前にいる家族よりスマホでつながる仲間が大事

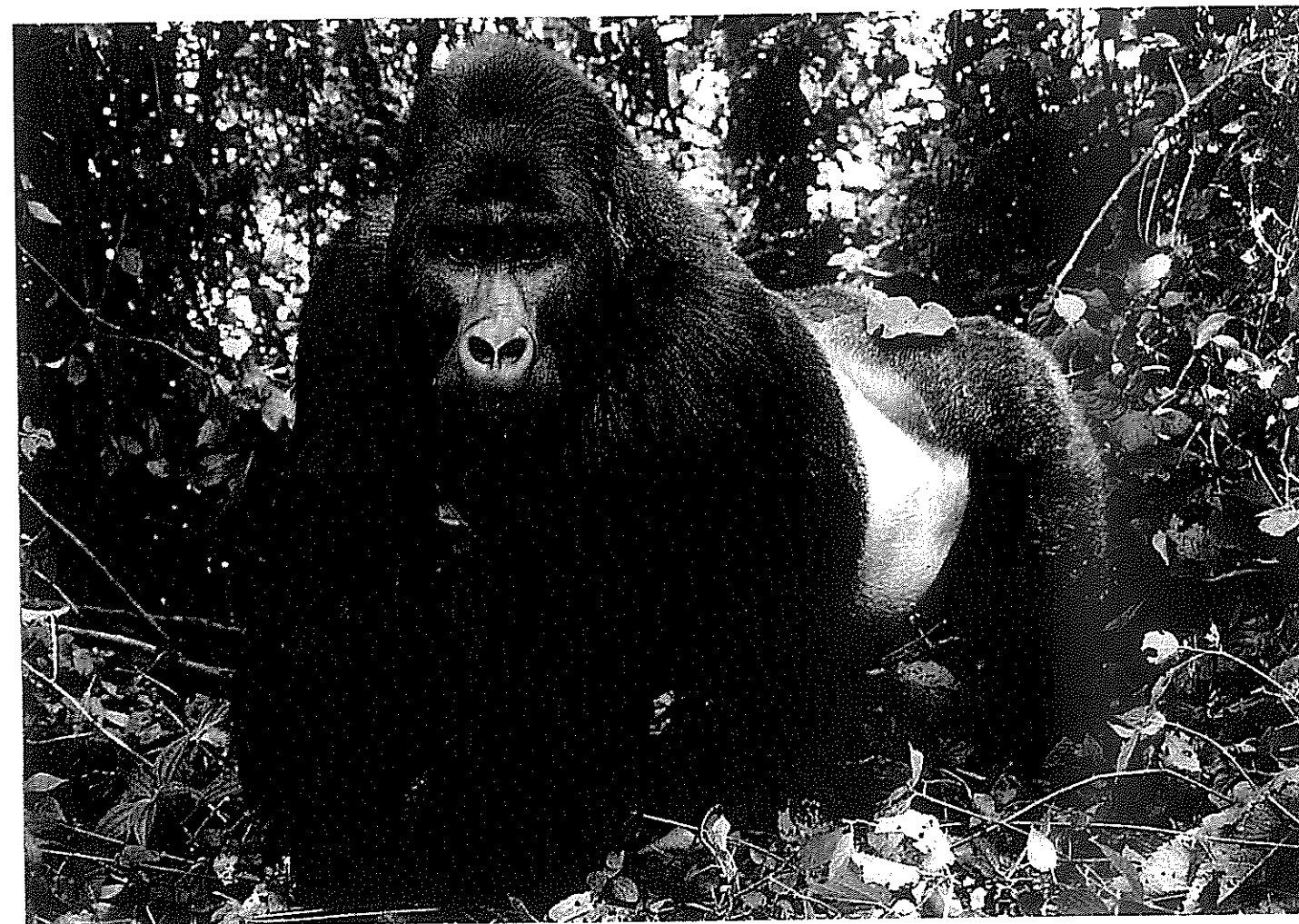
「ゴリラからの警告」はいう。人間の眼は白目が特徴だとおっしゃる。アジア系は黒目、ヨーロッパ等人種によって色は変わるが白目が特徴である。ゴリラの眼は眼球全体が黒い。彼らは、至近距離で互いの目をじっと見つめ合うことによって、コミュニケーションをとるのだという。人間の目は白い眼球のはたらきで人と人同士が少し離れたところからでも目を合わせながら話し合える機能が持ち合わせている。

ゴリラの家族は、毎日一緒にいて身体をつながり確かめる。相手の匂いや手触りなど、五感を使ってたしか合う。それがゴリラの群れ生活の根本です。だからゴリラは、数日間群れから離れてしまうと、もう戻れなくなってしまう。人間の世界でも子供たちはそういう感覚でいると思います。幼稚園や保育所で毎日友達と会っていれば、つながりが強固になるんですが、2、3週間、体調を崩すとか何かで会えなくなると、輪に入れなくなってしまう。それに近いです。

それが今の家庭の間でも身体的なつながりが希薄になり、もっとはっきり言えば、身体をつながりより脳のつながりに価値を置きはじめたんです。いつも誰かとつながっていたいという願望はあるのですが、目の前にいる人のつながりよりも、ネットを介したつながりの方が重要だと考え始めたのです。例えば誰かと会話していても、友達からスマホに電話がかかってくると、目の前にいる人は放っておいて電話にでるでしょう。家族で食事している時も食卓の上にスマホを置いて、電話がかかってくると団らん中でも中座してしまう。人間関係の接着剤である食事がブツブツ断ち切られて、接着剤の役を果たせなくなっていないでしょうか？

### ロボットに近い存在に

最近の人工知能（AI）ブームはn人間のロボット化を加速しているような気がする。少し前まで頭で覚えていたものが、今ではスマホの中に納まっている。友人の電話番号も地理情報までもこういったデータベースに頼らざるを得なくなってしまう。生れた時からスマホを手にかけている子供達こういったICT（情報通信技術）になれてしまっている。そのうち、データを利用して考えることさえも、AIの任せてしまうようになりはしないだろうか？文章を読解する能力を持たなくなってもAIさえあれば生きてゆける。そうなった時人間は、どうぶつではなく、ロボットに近い存在になっているのではないだろうか。（つづく）



成熟したオスのゴリラは「シルバー・バック」と呼ばれ、背中白い毛が特徴（写真提供：山際壽一）